

「武士道的キリスト者」新島襄

高平小五郎のアマースト演説

西 田 毅

キーワード

明治後期の新島像、武士道とキリスト教、「洗礼を受けた吉田松陰」

はじめに

時代や国、さらに地域によって新島襄の評価やイメージがどのように変わっていくのかという問題に少なからぬ関心を抱いている筆者であるが、二〇〇三年の秋学期に同志社・アマースト交換教授としてアマースト大学に在外研究の機会を与えられ、同大学のフロスト・ライブラリーのArchives & Special Collectionで新島襄史料集（全二十八ホルダー）をみているうちに、駐米大使（当時）高平小五郎の講演記録がみつかった。

それは、Address on J.H. Neesima, A.C.1870 by Baron Takahira Japanese Ambassador to the U.S. delivered in College Hall May 7, 1909と題するタイプ版の約五十頁の分量からなる演説記録であった。まず簡単な書誌的考察からはじめたい。アマースト大学が保管するこの原稿のコピーは、誰が何時、どのような目的で作成したのか、そしてまた、一九〇

九年（明治四十二）五月七日に高平が新島の肖像画の除幕式に招待されてアマーストにやってきたのは明らかであるが、大学構内の何処で講演したのかといった事柄について、今のところ、すべて確証がとれるわけではない。財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団に蘇峰宛高平小五郎書簡が四通所蔵されており、明治四十二年二月十七日付の書簡には同年の五月五日にアマースト大学で新島の肖像画の除幕式が挙行され、その機会に新島の功業について演説を依頼されたという趣旨の記述がある。これまでの新島研究では、上記日時は、現在、アマースト大学のジョンソン・チャペルに掲揚されている新島襄の肖像画の除幕式当日にあたるという見方が有力であるが、高平書簡はまさにその点を裏書する証拠資料になる。唯、実際に行われた演説日は「五月七日」なので、書簡にある「五月五日」というのは、高平の思い違いか、あるいは除幕式当日とは別の五月七日に演説日が設定されたかのいずれかであろう。従来の見方の根拠は「同志社明治四十二年度報告」書（一九〇九年）と高平が名誉学位を受けたことを報道する現地の新聞 *The Springfield Daily Republican*（1909・5・8）の記事、そして高平演説の文中の一節などから想定されている。本井康博氏は「アマースト大学の新島襄肖像画」、『同志社談叢』二十三号）で除幕式が図書館（読書室）に掛けられた一九〇三年六月とジョンソン・チャペルに移設された一九〇九年五月の二回にわたって挙行されたという見方を発表している。そして、高平のアマースト演説をこの二度目の除幕式と名誉学位授与の記念講演と解釈する。上掲の高平書簡は従来の見方を確定する有力な証拠史料になる。しかし、なぜ、六年の間隔を置いて二度目の除幕式を行うのか、そして高平の講演会場の *College Hall* をジョンソン・チャペル大講堂と判断しているが、アマーストのキャンパスに現存する *College Hall* の可能性はないのかといった場所の特定について、なお疑問が残るが、今はこれ以上事実問題の詮索に関与しないでおく。なお、本稿は小冊子に製本されて東京大学史料編纂所に所蔵されている。書名は *Address of Baron Kogoro Takahira On the Life and Works of the late Dr. Joe Neesima At the Unveiling of his Portrait at Amherst College*

Amherst Mass. May 7, 1909 Washington, D. C., Globe Printing Co. 1909. 全十七頁。内容は全く同じであるが、東大本では演説の冒頭にMr. President, Ladies and Gentlemenの呼びかけが記載されている。原本には著者の献辞と菊池家の寄贈印が押印されている。蔵書印から推測するに高平から贈られた菊池大麓が、のちに史料編纂所に寄贈したものである。

高平小五郎のプロフィール

講演内容に入る前に高平小五郎（一八五四—一九二六）のプロフィールを紹介しておく。

高平は明治大正期の外交官、政治家で、一八五四年（安政一）陸奥（岩手県）一関藩士・医学校学頭田崎三徹の三男に生まれた。その後、一関藩士で祐筆の高平真藤の養子になり、藩校教成館に学び、戊辰戦争に参加、一八七〇年（明治三）貢進生として大学南校に入学、明治六年に同校を卒業した。開成学校卒業後、工部省に出仕、のち一八七六年に外務省に転じ、二十二歳で米国に勤務、続いてオランダ、イタリア、オーストリアなどに駐在。一八九八年（明治三十一）外務次官に就任、義和団事件の收拾に当たる。一九〇〇年五月、駐米公使になり、在任中に小村寿太郎外相とともに日露講和会議の全権委員に任命され、首席全権の小村を助けて、ポーツマス条約の早期妥結に尽力した。帰国後、貴族院議員に勅選、一九〇七年特命全権公使として再度イタリアに赴任、一九〇八年一月アメリカ大使になる。大使在任中、国務長官ルート（Rout.E.）とのあいだにいわゆる「高平・ルート協定」を結んだ。退官後は一九一七年より二十六年まで、再度貴族院議員に選ばれた。一九二六年十一月二十八日に死去。以上が簡単な経歴である。

ところで、今日、高平の功績の一つにあげられるのが、一九〇八年（明治四十一）十一月三十日ワシントンで結ば

れた「高平・ルート協定」Root-Takahira Agreementである。内容は以下の五項目から成っていた。すなわち、(一)太平洋における「両国商業の自由平穩なる発達」、(二)太平洋における現状維持および「清国における商工業の機会均等主義」、(三)「上記地域における両国領土の「尊重」、(四)清国における「列国の共通利益の保存」、(五)前述の現状維持または機会均等主義を「侵迫」する事件が発生した場合、両国は対応措置について意見を交換すること。この協定は太平洋及び中国の現状維持をめざし、日米間に誤解の生じないことを期した交換公文であるが、以前に桂・タフト覚書(一九〇五)やヘイ(Hay, John)國務長官による「門戸開放」原則の表明(一八九九)などがあるにもかかわらず、改めて日米両国の現状維持と米国の利益保護が表明されたのは、それだけ、日露戦争後の日米両国の関係が悪化したことを意味する。当時の日米対立の構図は、先進工業国家アメリカと産業革命が緒に就いたばかりの日本の国益の対立であるが、日本は「戦後経営」にあたって、国内経済の成長と軍備強化、対外経済発展が必要とされた。そのために満州の鉄道経営や貿易の増大による利益の追求が求められ、さらに、国内の余剰労働力を海外に移植民することも重要な国策として検討されていた。満州における日米産品、とくに綿製品の競争の激化に加えて、アメリカにおける日本移民の排斥問題とそれによって生ずる日本側の海外移民奨励策の挫折といった事態の深刻化を迎えて、両国間の友好維持のための施策としてこの「高平・ルート協定」が結ばれたのである。この協定のねらいは、米国が満州における日本の特権を暗黙に了解する代わりに、日本は米国の「機会均等」主義表明を支持、そして移民問題では米国の方針を受け入れるという妥協の上に両国の経済利益の調和を図る試みであった。日露戦争後の日米両国のこのような重大な争点の解決に一役買ったのが、時の駐米大使高平小五郎であった。

さて、多忙な公務を割いてわざわざアマーストに向った高平は、名誉学位の答礼挨拶という意味合いもあったのであろうが、一体どのような内容の講演をしたのであろうか。

武士道的キリスト者 新島襄

高平の講演は彼自身の青年期のある回想談から始まる。

高平が開成学校（東京大学の前身）に入学したのは一八七〇年（明治三⁽¹⁾）であるが、筈をおうて上京してきた彼は旧安中藩出身の級友から新島襄の実弟の存在を知らされる。つまり、新島の弟はその級友の友人にあたる人物で、実兄が現在、アメリカで西洋の学問を学んでいるという噂を聞くのである。そこで、ある日、高平は級友と連れ立ってその青年を訪問することになった。そして、高平はその青年が二十三、四歳の年恰好の物静かで知的な人物 *gentle and intelligent youth* という印象をもった。そして、その若者はその後まもなくして死亡したという情報を得た。⁽²⁾ 高平の新島に対する関心の起点はこのようなエピソードに始まり、それ以来四十年を経て、今ここに、新島の精神的原点ともいふべきアマーフトカレッジで、新島の功業について語る機会を得たのはまことに不思議な因縁であると感慨を述べている。

ところで、高平の新島論を一読して最初に感ずることは、それが、高平自ら調査研究して形成された新島像ではないということである。そのことは、彼自身が明言している。すなわち、外交官としての職務上、海外生活が長く、新島の興味深い生涯について個人的な知見を深める時間的余裕にかけ、彼独自の独創的な見解を生み出せないこと、したがって、新島の弟子、知人たちによって書かれた数々の伝記や逸話に基づいて、生涯と経歴を語ったことを述べている。とくに、高平が用いた伝記として、Arthur Sherburne Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*. 1891に依拠していることは明らかである。当時、A.S.Hardyの本は信頼できる唯一の新島伝といつてよく、種本としてよく用いられた。種本といえど、J.D.Davisの *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima*. 1890もあったが、高平はこ

の本についてはとくに言及していない。

アマーストは新島の大学生活の場であり、会場には新島をよく知り、彼に対して同情的な人も多いと思われる聴衆に対して上記の伝記に新たな情報を付け加えることなど可能なはずがないこと、そこで、あえて日本人から見た新島の生涯について、一つの意見を申し述べることで責めを塞ぎたいと断っている。

さて、ここから、論者は「一気にこの演説の核心を衝く命題の「武士道的キリスト者」新島論が展開される。新島が典型的な日本人 typically Japanese であること、すなわち、「彼は何よりも、サムライと呼ばれる階級の出身で、かつての日本人のバックボーンを形成したと考えられている武士の生活と精神的環境のなかで育てられた」ことを強調し、「日本以外のいかなる場所も彼のようなタイプの人物を生み出す環境はなかった」と述べている。しかし、それならば、新島の米国における就学の意味は何であつたのか。アメリカは、新島が出国以前にすでに形成されていた、そのような性格を成育させる上で格好の場であり、アメリカ以外のいかなる国もそのような精神的役割をはたし得なかったという確信を披瀝している。このように新島が武士階級に属し、武士道 Bushido の厳しい規律の影響を受けて人間形成を行つたことを強調する高平であるが、さらに、彼は、新島家が中級武士としての家格であることに注目している。つまり、「徳川時代の日本人の生活水準からいえば、それほど豊かでもなく貧乏でもない生活環境、さらにいえば、家格が高くて驕慢な気風をもつたり、逆に、より下層の貧困で卑下しなければならなかった生活水準とはちがう家柄に生まれた」ために、「貧困によつてその自尊心が奪い取られたり、また贅沢な生活習慣によつて気力や体力が弱められる様な境遇を体験しなかった」と述べている。そして、新島は通常の武士階級の子弟が受けるような教養の習得、日本の古典や漢籍の学習に加えて、剣術や馬術といった武道に励むが、その才能が認められて、十四歳のときに蘭学修業が許される安中藩士の三人の一人に選ばれた。また、十六歳で藩主の書記（祐筆）待遇に取り立てられる。

高平は青少年時代の修学とともに家庭における祖父の厳しいしつけにもふれている。両親ではなく、祖父から受けつたしつけを通して、由緒ある新島家先祖代々の血脈を自覚したこと、そして、毎晩のように祖父のひざに抱かれて聴いた偉人英雄伝の話から、儒教的な「修身齊家治國平天下」の信念が涵養されていたエピソードを紹介している。ただ、祖父が強調したのは、とりわけ両親の言いつけに従順であること、友人に対する信義・忠信、日常生活において常に言動に慎重を期すこと、決して他人を欺いたり、媚びへつらつてはならないことを教えたのであるが、こうした徳目の強調は、通常、主君への忠誠を第一義とする封建時代のモラルとはやや異質な新島家の雰囲気をわれわれに感じさせる。とくに、ある日、母の言いつけを守らなかった幼い新島を祖父が捕まえて布団にくるんで押入れに閉じこめた事例を引き、「憎んでは打たぬものなり笹の雪」と詠んだ句にしつけの中身が表われていると解説している。このように、誇り高い武士の出自に加えて、新島家のしつけを重視した高平に注目しておきたい。また、幼少のころ、新島はよくお寺にお参りして将来、立派なサムライになれるように祈禱した。そこには、神仏の加護をあえて疑わず、素直に靈力に帰依する姿勢が日常生活の習慣になっていたことが分かる。

次に高平が新島の性格の顕著な特徴としてあげているのが、自尊心と自己抑制の精神である。そもそも、この精神傾向は武士道に由来するというのが高平の考えであるが、青年期の行動を具体的に指摘することで証明を試みている。たとえば、脱国して、乗船したベルリン号の乗組員の些細な言動で、自尊心が傷つけられ、思わず持っていた刀の柄に手を掛けたが、自らの志の大きさにくらべて傷つけられた自尊心の小ささに気付いて無鉄砲な行動を思いとどまったのは、まさに自己抑制のなせる技であった。そしてまた、誤ってワイルド・ローヴァー号の船長のキッチン用具を海中に落としてしまったとき、持ち金を全部はたいて弁償しようとしたこと、漢訳聖書を購入するため武士の守りで名誉のシンボルである刀を売却したこと、パトロンのハーディーが新島の所期の目標の達成のため、物心両面の援助

を惜しみなく提供しようとしたとき、新島は唯、自らの教育費用に必要なだけの資金を受け取ったことなど、このような態度は、新島が日本に帰って、独り立ちして行動するようになってから表明された数々の言動によく見られる特徴であつたと指摘している。ここで指摘されている新島の自己抑制という性向については、帰国後の同志社設立に見せた粘り強い努力、仏教のメッカ京都における仏教徒の反対やキリスト教に対するさまざまな偏見、政府の無理解、アメリカンボードとの間の不協和音に囲まれながら、ひたすら、同志社の経営と伝道に忍耐強く奮闘したことからもわれわれは容易に理解できる。

高平が揚言するサムライ精神とは、自尊心や自己抑制に加えて、正義感、騎士道精神（勇敢さ）chivalrousness、廉潔、忍耐力であり、これらの武士道的道德観念が明治維新当時の日本の武士階級にみられる共通の道德的特質であつた。そして、新島は渡米する前に、すでに、このようなサムライ階級の精神的環境のなかでその性格が形成されていたことを強調する。それでは、サムライ新島は、アメリカという異なる文化圏に接触してその価値観がどのように変容したのか。これは武士道とキリスト教の内的関連という興味あるテーマであるが、高平は、「自由な信仰と自治、克己の原則に基づくアメリカ精神の影響を受けて、本来の性格が修正された」こと、すなわち、「彼の武士道（武士道それ自体は日本固有のものであります）が、世界的な普遍性をもったものに成長していった」ことを強調している。そして「彼が元来、正しいと信じていた道德的な性質をもった教訓が宗教的な教義へと変化していった」という。ここで、高平は「教訓」と「教義」を同じ英語のdoctrineという単語を用いて説明している。敷衍していえば、the doctrine of the moral nature of the doctrine of worldly character, that of a religious quality への変化について表現なのである。そして、岩倉遣欧米使節団に謁見したとき、使節団一行の前に進み出て、深々とお辞儀をする伝統的な日本式拝謁のスタイルをきっぱりと断り、「自由な国の独立した紳士として民主主義的に扱われるよう求めた」り、日本公使館が八

ーデーに對して、それまでの新島のために支出してくれたすべての経費を弁済する意向であることを知って、ハーデーが受け取ることを拒否してほしいという希望を友人に書き送った例をあげて、ここに示された行為は、その後生涯を通じて新島が実践道徳として守り続けた、「自由な信仰と自治・自立」の人を証明すると主張している。国禁を犯して脱出した新島がワシントンで出会った日本政府の高官に對して採ったこのような態度は何かという点について、高平は新島におけるHigher Powerへの奉仕をあげている。すなわち、新島のモチーフは、今や、君主に仕える「臣民」subjectではなく、一個の「日本公民」Japanese citizenとして、国家（政府）を超えたより高い次元の存在（神、Higher Power）に對する奉仕へとその忠誠心がシフトしている点を重視している。

恩人ハーデーに對する日本政府の弁済に對して示された新島の態度は、そのことによって脱国、アメリカ修学、キリスト教主義思想による日本の国民精神の向上といったこれまでの自主的な選択肢が、政府に對する義務や拘束によって、大きく影響を受けることへの怖れや抵抗感が働いたのである。

高平が武士道という日本固有の道徳的なドクトリンが世界的な普遍性をもった宗教的な教義へと変貌したという場合、彼が道徳と宗教の関係をどのように捉えているのかといった問題、さらにまた、武士道に代表される日本・東洋道徳と西洋の宗教、とくにキリスト教精神によって形成されたモラルの共通の側面を強調したいのか否かといった問題は、この講演から十分に理解することは出来ない。日露戦争前後、日本の好戦熱を警戒する欧米にあつて、武士道の普遍的性格を説き、西洋の騎士道と共通する観点を強調した新渡戸稲造の英文『武士道』(Bushido, The Soul of Japan, 1899)が当時、アメリカで広く読まれていたことを思うにつけ、この点に関する高平の問題意識が気掛かりである。

愛国者・「洗礼を受けた吉田松陰」新島

「熱烈な愛国者であつた新島は、情熱的なキリスト者になり、代表的な武士道的キリスト者に生まれ変わった」と捉える高平は、「愛国心を縦系に、キリスト教を横系にして織られて出来上がった教義」がその信念の中核にあるとみた。その一例を新島の「覚え書」の英雄観に求めている。それは、日本人の英雄崇拜に触れた一節であるが、独立の觀念に欠ける日本人の英雄観は利己的な動機に基づく個別の英雄崇拜を超えられないことを指摘し、利己的な目的を超越したより高次の英雄（Hero of Heroes）に関心が向けられることを期待する。ここから明らかなことは、新島がいう英雄とは「キリストの生命に表出される神の力」であり、ソクラテス、孔子、アレクサンダー、ナポレオンの類ではない。このような無私の精神と結びついた国家愛こそ新島のもつとも強調したい信念であつたという捉え方を示した。

そして、この愛国心は、元治元年の函館出国の意図とも絡めて理解された。江戸湾に停泊する一艘の黒船を見たことが機縁となつて、西洋諸国が到達した近代文明に日本が到底太刀打ちできないという想いが、祖国日本の改革熱につながり、近代科学の習得や制度文物の移入のみならず、物質文明の根底にあるキリスト教教義の解明にまで向つたという脱国動機の解釈である。ここから、新島より十年早い一八五四年（安政一）下田から米艦に乗船を試みて失敗した吉田松陰との比較論が展開される。新島のことを「洗礼を受けた吉田松陰」と評したのは、徳富蘇峰であるが、高平はわざわざ蘇峰の考え方を援用しながら松陰と新島の二人に共通する側面を語っている。アマースト講演に際して、蘇峰から新島に関する多数の文献資料を送ってもらつたこと、そして、新島教育目標が「武士道の精神的鍛錬に基礎づけられたキリスト教の教え」を適應することにあり、新島は「洗礼を受けた吉田松陰」であることを今なお信じているという蘇峰の来簡を紹介している。ここで、高平は吉田松陰に馴染みのないアマーストの聴衆に向つて、

吉田松陰が何者であるか、ペリーの『日本遠征記』の一節を引きながら語っている。松陰は近世の日本史上特筆に値する幕末の志士であり、天皇の政權回復を目指して幕政改革や反幕的实践活動を果敢におこなったこと、その一方で彼はまた、アメリカに密航して直に西洋文物や社会秩序を学ぼうとした人物である。そして、出国に失敗した彼は捕らえられて主君の長州藩主に監禁された。松陰が学校（松下村塾）を作り、子弟を薫陶し、その愛国的思想に対する多くの信奉者を養成したのは、まさに藩主の監視下に置かれていたときである。三十歳の若さで安政の大獄に座し、江戸で刑死した松陰は、彼自ら「愛国的目標」（幕政改革）の達成にコミットできなかったが、幽閉されている二ヶ月の短い間に多くの「愛国的改宗者」を生み出し、その弟子たちが松陰の遺志をひきついで立派に偉業を成し遂げた。伊藤博文をはじめ、明治新政府の官界や軍部で活躍する人材の多くは、この松陰門下から輩出されたことを力説している。このような「憂国の志士」、「強力な意志と個性」の人松陰と比肩して恩師の新島を論するのが蘇峰をはじめとする多くの門下生たちである。

ところで、高平からすれば、新島を松陰と並べて論ずるといふのは、日本人の考え方からいって、決してささやかな賛辞ではないことを、アメリカ人の聴衆に向って力説している。そして、新島の人と生涯を回顧して、「信条においてはキリスト者」、その「理想として抱くのは愛国心」という「武士道的キリスト者」新島像を、高平は断言してはばからないのであった。新島が志半ばにして倒れたとき、あれほど彼の事業（伝道と同志社創設）に激しく反対した仏教界の僧侶たちが、心から敬意と哀悼の意を表明したのも不思議ではないと述べている。

高平はまた、新島の生涯を悲劇的な観点からだけ見ているわけではない。大学設立運動を推進する上で、さまざまな妨害や反対に遭遇したが、同志社を大学としてかなりの水準にまで向上させ得ただけでなく、彼が亡くなる前年の一八八九年に、信教の自由を保障する帝国憲法（第二十八条）日本臣民は安寧秩序を妨げず及び臣民たるの義務に背

かざる限りに於いて信教の自由を有す」が制定されたことを注目している。すなわち、二十八条の「信教の自由」の規定は、長い間キリシタン禁令に悩まされてきた明治期のキリスト者にとって、画期的な権利宣言と目された。すなわち、公共の秩序と安全、臣民としての義務に反しないかぎり、国家が人々の信教の自由を侵してはならず、信教告白の自由、宗教宣伝や宗教教育の自由に干渉してはならないという憲法規範は、日本国民がそれまで歴史上経験しない権利規定であった。新島自身は生きて十分に「信教の自由」を享受する機会はなかったが、この権利の実現が、新島にとって祝福すべき現象であり、うまく「明治天皇の叡智」がこの権利の実現に作用したという認識を高平は示している。しかし、ここでは、キリスト教公認の背後に隠されていたキリスト教排撃の側面、つまり、帝国憲法や教育勅語に示される天皇の神聖化に反する天賦人権論やキリスト教の人間観が、支配層によってどのように排除され、克服されていったか、具体的には、明治二十年代の不敬事件や「教育と宗教との衝突」論争など一切論評されていない。

以上、紹介した高平の新島観は、彼自ら認めるように、当時の有力な新島イメージ、特に蘇峰徳富猪一郎の所説に拠りながら展開されていることが確認できる。かくして、我々は「武士道的キリスト者」、「洗礼を受けた吉田松陰」、強烈な愛国心と結びつけられた「偉人英雄」像が明治末期に形成されていたことを確認できるのであるが、さらに、蘇峰の吉田松陰論の変遷とも符合する一面が感じられて興味深い。

蘇峰の代表作『吉田松陰』の初版は一八九二年（明治二十五）三月の本郷会堂の講演に基づき、同年十二月に刊行された。そこには、「新島先生の記念として、斯の冊子を献く」の献題がある。本書は吉田松陰を中心に明治維新「前後の大勢、暗潜黙移の現象」を観察し、維新「革命家としての松陰」像を描いたものであった。後に乃木將軍の強い要請があつて、一九〇八年（明治四十）十月に改定増補版を出す。すでに初版と改定版の異同に関する研究があり、両版の思想的内容の検討を通して、蘇峰の思想的変遷を考察することは優に独立のテーマたりうる。改定版には初版

にあった「革命」の文字がすべて、「改革」、「革新」、「変革」等に改められ、「侵略」は「膨張」に変えられるなど、全体に過激な言辞が穏健な表現に修正され、「皇室中心主義」思想がより鮮明になっていることはすでに先学の指摘するところである。⁽⁴⁾ もちろん、高平はアマースト講演で、蘇峰と同じ「皇室中心主義」思想の文脈で松陰と新島を一線に結びつけて論ずるという手法はとっていない。また、維新の革命家という観点からの松陰論が展開されているわけでもない。『吉田松陰』初版本の成立過程を研究した杉井六郎は、本郷会堂の講演が『国民之友』に連載されたときにあつた、維新史における松陰と新島の下田踏海と函館出奔の成否の比較が削除されている点を指摘し、「これは明治維新、第一革命の主導を松陰に、「第二の維新」の担い手を新島に当てた考えであつて、いまは在天の人となつた新島に蘇峰の抱いたイメージを示しているばかりでなく、松陰に寄せた憧憬・崇敬とも交錯したものである」と主張している（同上、二〇〇頁）。つまり、蘇峰において、明治維新の志士像のうちで、「もっとも精神的な純潔さと、血気の革命性と至誠とをそなえた松陰像」が確立されるのであるが、そのイメージは「同志社大学運動に苦闘する新島襄の姿を媒介に成立」したと捉えられている。杉井曰、「松下村塾」の祖述を意図した大江義塾、そして、自由・自治を教育に唱える恩師新島とその経営する同志社に寄せる敬愛と声援、とくに、同志社の礼拝堂における吉田松陰論の講演という展開は、かれにおける平民主義の唱道および実践の具体的展開の姿であつた。病軀に鞭打つて活動し、ついにたおれた新島の像は、蘇峰の心事において松陰像とやがて交錯する（同上、二二三頁）。蘇峰の松陰論形成過程に見られる、「新島の歴史的人物化」、新島に対する蘇峰の「心的状況の昇華」の強調である。

高平の新島論の形成に与えた蘇峰の影響について、話が少しく枝葉の問題にかかずらうことになつたかもしれない。しかし、アマースト講演を引き受けるに当たつて、高平がわざわざ書簡で蘇峰に参考文献を照会しており、その所説によりながら草稿を準備した経緯を考えると、蘇峰の心象風景において、新島と松陰がどのような位置を占めていた

のかという問題を読者のために整理しておく意義があると考えたわけである。

最後に一点気づいたことであるが、高平は、新島とアメリカン・ボード（北米合衆外国伝道会社）の關係について全くふれていない。周知のように、新島の身分はアメリカン・ボードの宣教師であり、ボードの日本派遣伝道師としての職務を担っていたことは事実である。その意味では、彼の日本における教育活動は、福沢諭吉のような私学経営者が取った独立の姿勢とは異なる。アメリカン・ボードの資金援助を受けて同志社の学校用地や建物を取得し、有能なアメリカ人教師や牧師を雇い入れることが出来た。そして、新島がもつとも悩んだ問題は、ボードが要求する伝道拠点としての同志社、キリスト教を拡張するために必要な人材養成機関としての同志社の位置づけと、高等教育機関としての大学設立を望む日本人教師や卒業生の要望とのあいだの基本方針をめぐる対立の板ばさみになったことである。浮田和民が、明治十年前後のアメリカン・ボードと同志社の分離独立問題についてふれ、当時、大阪にいた米国人宣教師のH・Hレビットは早くから同志社とボードの分離を説き、同志社はいつまでも伝道会社に頼っているばかりという意見であったが、新島やデイヴィスは分離独立論に反対であり、宣教師のあいだでも複雑な意見の対立があったことを伝えている。日本人宣教師のなかでは、沢山保羅、成瀬仁蔵らが分離独立論を唱えており、宣教師の間では分離論が有力であったという。もしその時、思い切って分離に踏みきっていたならば、後年、同志社を揺るがす騒動は起らずにすんだであろうと浮田は述べている。⁽⁶⁾

ともあれ、「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」をモットーに「教育及び伝道一如の主義」を实践せんとする新島の苦衷は、どうやら高平の関心の外にあったようである。

高平がここで明らかにした新島の人物像は、明治後期の新島イメージをほぼ正確に代弁しているといえよう。さら

にまた、そこには、国家への忠誠心を強調し、武士道倫理とサムライ精神の結合やその普遍的性格を力説するなど、日露戦争後の国家主義的な思想が前面に出ていることも特徴として指摘できるであろう。

明治後期の新島イメージの形成に初期の同志社卒業生が大きく寄与していることを思うとき、第一回卒業生の浮田和民が揚言する次の新島論が、いかに、蘇峰や高平演説の主張に類似しているか、その符合ぶりに一驚させられる。最後に、その一節を引用して参考に供したい。

「元来、新島先生の人格は維新前に於ける日本の武士的教養によってその根本を培養され、それがアメリカに渡って当時まだ純然として存在して居った新英州清教徒の精神に接触し、更に光沢を加えて出来上がったものである。従って先生の人格はアメリカ人より見れば真にアメリカ人と思はれたであらう。それで先生は米国伝道会社の宣教師として派遣された（中略）併し先生の人格には米国清教徒の精神に吻合すると同時に、それに逸脱するものがあつた。畢竟先生は日本のために日本を脱して渡米し、また日本のために宣教師として帰国されたので、先生以前に先生はなく又先生以後に先生はあり得ない機会と境遇とに活躍された」（同上）。

（１）開成学校は一八五五年（安政二）の洋学所設置に始まり、翌五十六年蕃書調所と改称、六十二年（文久二）には名称を洋書調所と改めた。維新後、新政府に接収されて名称を開成学校と改め六十九年一月に開校した。さらに、政府は同年六月、開成学校を昌平学校（昌平坂学問所＝昌平校）や医学校と合併して大学校の設立をみた。そこで、開成学校は、医学校とともに、昌平学校を本校とする大学校に統合され、大学校分局となるが、同年十二月の制度改革によって大学南校と改称した。名称の由来は、旧開成所以来、その位置が御茶ノ水にある大学本校の南方にあたる東京神田一ツ橋にあつたことに基づく。大学南校規則によれば、普通・専門の二科あり、専門科を法科・理科・文科の三科に分けたが、実際には普通科のみの生徒を収容した。生徒は十六歳以上で定員は一千人であつた。さらに、各藩から人材を選抜する真進生制度もあり、大藩、中藩、小藩のそれぞれ三、二、一人の割合で約三百人の生徒が入学した。教育内容は、ほぼ、高等学校程度の水準であつたという。

高平が入学したのはまさに、大学南校という名称に変わったころのことであると思われる。

- (2) 新島の実弟は名前を双六といい、一八四七年（弘化四）十二月十四日生まれで、その修学歴をみると、「明治二己巳年九月十四日東京昌平坂学問所江為修業出入三ヶ年之御暇願之通被仰付（中略）同廿八日安中出立、十月朔日東京詰太山雄之助殿方江着、同二日公用方より聖堂江願書差出、同廿七日入寮南寮三十五番之寮江引移、同藩河合鉄太郎殿と同居」（『新島襄全集』

3 注二十一 七百四十二頁）とある。なお、双六の死亡は一八七一年（明治四）二月七日、行年二十五歳であった（『同上』注九十一 七百五十四頁）。

- (3) フリント夫人（Otilia Flint）に宛てた一八七一年三月二十一日付け書簡。

- (4) 杉井六郎『徳富蘇峰の研究』二〇七頁 法政大学出版局 一九七七。

- (5) 徳富蘇峰記念塩崎財団には、先の書簡のほか、一八九六年（明治二十九）十一月から十二月にかけて、当時、欧州外遊中であった蘇峰にあてた書簡が数点ある。両者は旧知の間柄であった。

- (6) 浮田和民「私の新島先生観」、『新島先生記念集』同志社校友会刊 昭和十五年初版。

高平講演全訳

故新島襄博士の生涯と業績

男爵 高平小五郎

アマーストカレッジにおける肖像画除幕式において

一九〇九年五月七日

総長先生、並びにご列席の紳士淑女の皆さん、

今からもう約四十年昔の一八七〇年のことになりますが、ちょうど修学のため、私が故郷を出て上京してきた直後に、級友の一人から次のような話を聞いた事がありました。

つまり、その友人は上野の国にある安中という小さな城下町出身の人物でありましたが、大学（当時の昌平坂学問所、のちの開成学校、東京大学の前身（訳者注）に彼と同郷の安中出身の学生が居て、その実兄がアメリカで西洋の学問を学んでいるというのです。ある日、私はその友人と連れ立って一緒にその青年を訪ねました。歳は二十三から二十四才位と思われるその若者は、物静かで知的な感じのする人でした。そして、その若者はその後まもなくして死んでしまいました。私は一度彼に会って面識がありますので、彼の兄という人、つまり、近代日本の第一級の教育者となった新島襄のわが同胞に対する教育事業に対する関心が湧出し、新島がいったいどのような生涯を送ったのであろうかということについて、ずっと興味を抱き続けて参りました。

私が偶然、四十年前に新島の弟に出会った不思議な事情を考えますと、それ以来一貫して関心をもち続けてきた新島の精神的原点とでもいうべき、ここアムーストで、すなわち、新島が祖国の同胞の道德的向上に自らの全生涯を捧げる決意を固めることになった教育的感化を得たこの場所において、新島の肖像画の除幕式に立ち会える機会を与えられたのは、当然のめぐり合わせに思われてならないのです。私にとって、同胞の一人である新島が、この近代文明の中心地にある彼が学んだ教育機関において、立派に評価されていることを実感できるのは、日本を代表する立場にある者として、まことに光栄であり、その喜びは何物にも換えがたいものがあります。しかし、私は次のことを率直に申し上げなければなりません。私は職業柄、多くの時間を海外で過ごしておりまして、本日、ここでお話する新島の興味深い生涯について、くわしく調査研究する時間的な余裕に乏しく、残念ながら、十分、納得のいくお話を力量のないことをお断りしなければなりません。そのため、私の講演が新島の伝記や逸話の数々、それも、彼の日本人の友人や教え子たちが綴った資料から得られた情報に基づいておりまして、新島の生涯と経歴に関する私自身の独自の見解というのはあまりないのです。当地アムーストは新島が学生時代を過ごした所であり、ここに住んでおられる市民の方々のなかには、新島の友人も大勢おられるにちがいないであろうと存じます。さらに申し上げたいことは、すでにアーサー・S・ハーディー Arthur Sherburne Hardy（新島のパトロン、ボストンの紳商アルヒュース・ハーディーの息子（注）が書いた『新島の生涯と書簡』（Life

and Letters of Joseph Hardy Neesima, Boston and New York: Houghton, Mifflin, 1891) がその人物と業績について余すところのない説明をしていくので、私はとてもそれ以上の情報を付け加えることができるとは考えられません。

ここに「ご出席の友好的で思いやり深い皆さん方のような聴衆に対して、このような弁解をするのは何か場違いな印象を与えるかもしれません。しかし、日本人の眼からみた新島の生涯に関する一つの意見を開陳するのをもた、皆さんの興味に全然合わないものではないかもしれない、ということを取上げて申し上げたいと思います。」

誕生からその死にいたるまで新島の生涯は、彼がアメリカで受けた教育の結果、その思想や抱負が大きく練磨され、深化されることとはあったとしても、やはり、彼は典型的な日本人であるということを最初に申し上げたい。すなわち、日本以外のいかなる場所も彼のようなタイプの人物を生み出す環境はなかったというふうに私は考えています。そしてまた、彼のそのような性格を助長し、進展させたのがアメリカ以外のどの国にもないということを強調したいと思います。彼はサムライと呼ばれる階級の出身で、かつての日本人のバックボーンを形成したと考えられている武士の生活と精神的環境のなかで育てられたのであります。新島家は武士の家格としては中級武士 (medium) に属しており、徳川時代の日本人の生活水準からいえば、それほど豊かでも貧乏でもない生活環境、さらにいえば、家格が高くして驕慢な気風をもったり、逆に、より下層の貧困で卑下しなければならないといった生活水準とはちがう家柄に生まれたのであります。新島は貧困によってその自尊心が奪い取られたり、また贅沢な生活習慣によって気力や体力が弱められるような境遇を体験しなかったのです。武士道 (Bushido) と呼ばれる厳しい日常生活の規律の影響を受けて育った新島は、自らの目標の達成に向けて、ひたすら正直で真剣な態度をもっていました。幼いときから日本の古典や漢籍を学び、剣術や馬術を修練しましたが、やがて、その優れた才能が認められて、十四歳のとき、安中藩で蘭学を学ぶことのできる三人の藩士の一人に選ばれました。そして十六歳で藩主の書記待遇になっています。彼が始めて漢訳のアメリカ合衆国史を読んで、近代文明の研究に大きな関心を

抱いたのは、ちょうどこのころのことです。そして、新島はそのような理由もあって、それ以後、オランダ語の勉強に一層、真剣に取り組むことになりました。当時は彼の友人たちはもちろん、親戚のなかにも保守的（因習的）な考え方が支配的でありましたので、彼らは新島の態度を理解できず不愉快に思っただけでなく、嘲笑したり、批判したりする人々が大勢いました。しかし、彼は、一旦決めた方針は断固として変えず、自然哲学や数学など、当時、蘭学で学ぶことができる領域の学問を決意も新たに学び始めたのであります。

ある日のことです。彼は偶々、江戸（現在の東京）湾に停泊する一艘のオランダの軍艦を見ました。海上の荒波にゆられながら、多数の小さな帆船を従えて浮かぶその落着きはらった威容は、驚嘆すべき姿であり、難攻不落の軍艦に思えたのです。そして、彼は、直ちに、そのような壮大な軍艦を作ることのできる国民というのは、日本の国民よりもはるかに優れた才能をもった国民に違いないという風に考えたのであります。壮大な軍艦を見たことによって、日本は西洋諸国が到達した近代文明に、到底、太刀打ちできないという考えを植えつけられ、祖国を改革するには、彼自身が西洋モデルの文明を推進する役割を担わなければならないと思いつくようになりました。彼はまた、海軍の創設、通商の促進の重要性を認識し、その一步として航海技術を習うことを決意し、代数、三角法、幾何学といった必要な関連学問を学びました。このような西洋の近代科学の方法を習得する一方で、多くの他の方面の出版物に接するうちに、キリスト教の教えに多大の魅力を感じるようになりました。とりわけ、彼が一冊の漢訳聖書に触れたことの意義を指摘しなければならぬでしょう。彼は友人からその聖書を借りてきて、深夜、ひそかに人目を盗んで読んだのです。何故そうしたかといえば、当時、聖書を読むことは国法で固く禁じられていたため、処罰を怖れて慎重に対処したのです。しかし、そのような冒険をした結果、彼は十分、報われた面もあります。すなわち、聖書を読むことによって、それまで、キリスト教に対して抱いていた数々の疑問が解けて、キリスト教の根本的な教義がよく理解できるようになったのです。しかし、聖書の勉強が上達しても、なお、時折、疑念が生じ、その疑問を十分に説明するには、信仰の自由が完全に保障されている国へ行って、直接、優れた学者に教えをこ

うしかほかに適当な方法がないと考えようになりました。こうして、いよいよ新島は、真理を求めて、祖国を脱出する決意を固めたのであります。

新島がどのようにして外国へ行くべきかを考えていたころ、ちょうど偶然に、彼は近く函館に向って出航する予定のある汽船があることを耳にしました。函館は条約で開港が認められていた、日本の北部にある通商貿易港でありました。彼は藩主と家族の同意を得て、函館行きの船に乗り込みます。それは一八六四年、彼が二十一歳の時のことでありました。いろいろ奔走努力の末に、アメリカの帆船に乗船し、中国の上海に向いました。その当時、日本では、政府の許可なく外国へ行くことはもつとも重大な国禁に触れる行為であり、したがって、それは死罪に相当する刑罰が加えられたのであります。それゆえ、新島がそのような危険を犯して出国を企てるのは、きわめて大胆な行動であつたといわなければなりません。彼は、函館のある外国人商館に出入りする役人を名乗る日本人店員（富士宇之吉＝注）と知り合いになり、その従僕になります。二人は、闇夜に、沖合いに停泊していたアメリカ船（ベルリン号＝注）に乗り込んだのです。そして、上海に着くや、函館から連れてきてくれた船長サツポリ（セイウオーリー William T. Savory＝注）の親切な計らいで、ボストンに向う他のアメリカ船（ワイルド・ローヴァー号）への乗船の斡旋をしてくれました。船賃は新島が下働きをする約束で乗り込み、それから一年以上の航海の後、ようやくボストンに到着したのであります。ワイルド・ローヴァー号の船長 H・S・テイラーは新島の性格と抱負をよく理解し、航海中、彼に英語と航海術を教えました。そして、ボストンに着くと船主のアルフュース・ハーディーに会って、彼が新島について知るところのすべてを語り、同時に、この青年新島が米国で勉強できるよう、あらゆる便宜を与えてやって欲しいと頼んでくれたのであります。若き日の新島がここアマーストで、そしてボストンやアンドーヴァーで、人類の福祉と文明の発展のために貢献したいという高貴な目標を達成するために、惜しみなく与えられたハーディー夫妻の寛大な援助の下で、彼が何を成し遂げたのか、そしてさらには、祖国日本だけでなく、それが大きく極東の国々の

人々に対して押し及ぼされる恩恵について、私は何ほどのことを皆さんに語ることができるでありましょ。しかし、新島がここで行ったすべてのことはここに居る皆さん方がよくご存知だと思いますので、私はそれ以上、何か新たな知識を付け加えることができないとは思いません。唯、日本からやってきた若者に対して、マサチューセッツ州の人々が示された寛大な心、誠実で真率な態度が新島と日本人に深い感動を与え、アメリカ国民に特有な偏見のない心の広さの証としてその好意に感謝したことを、ここで申し上げれば十分だと考える次第であります。

そこで、一八七四年に新島が日本に帰ると、彼はアメリカの友人たちから受けた物心両面の援助によって、目標の実現に向けて、すべての精力を傾ける覚悟を決めたのであります。まず始めに、彼は家族の全員をキリスト教に改宗させました。そして、彼が故郷の安中に数ヶ月（数週間 注）滞在しているあいだに、地域の人々にキリスト教の説教を始めたのです。その当時の日本ではまだまだキリスト教に対する反発が根強かったのですが、彼は積極的に伝道活動を行ったのであります。しかし、彼はまた、最初から、どこか大きな都会を伝道活動の拠点にしたいと考えていました。つまり、大阪に学校を作る計画でありました。そこで、市の当局に申請したところ、学校を作るのはいいが、クリスチャンの宣教師を雇い入れるのは罷りならぬという達しが出ました。次に彼は京都を目指しました。京都では、山本覚馬という強力な支持者に恵まれました。山本はそのころ京都府の顧問で政界の実力者でありました。また、彼はやがて、新島の義兄弟になる人でもあります。山本らの協力で、その後、多くの困難に遭遇しますが、とにかく、京都で学校を創設するという大きな仕事の目標が達成されることになったのです。京都は、何百年ものあいだ、幾多の仏教の総本山が存在する伝統的な文化の中心地であり、キリスト教の宣教師がそこに居住することは許されなかった。まして、キリスト教の学校で説教することなど、考えられないことでありました。

しかしながら、新島はアメリカ人と日本人の友人の協力を得ながら、京都に学校を作る運動を粘り強く続けたのであります。その

結果 数年後には彼の念願がかない、広く京都市民の理解も得られて、京都府当局からキリスト教の集会を開く自由を公認されました。また、教育問題について、新島はたびたびその専門的な見解を求められたのです。一八八一年、彼が福音伝道のために京都のある劇場で公開講演会を開いた（『明治十四年六月、京都四条北の芝居に於て宗教演説を催す』、『新島襄全集』 一六三頁 注）ところ、五千人も男女の聴衆が集まり、二十人の説教者の話を熱心に聞き入ったのであります。わずか数年前には、キリスト教の布教に対して、ありとあらゆる種類の反対や脅迫が加えられていたことを考えますと、そのような盛大な光景は全く予想できなかったことであります。このような成功に勇気付けられた彼は、大学レベルの教育を実現したいという大きな計画を抱くようになりました。しかし、長年にわたる過労とストレスのために、彼の健康は著しく損なわれました。そこで、彼は、外国旅行が健康の回復に役立つかもしれないと考えて、一八八四年、ヨーロッパとアメリカに向けて旅立つたのであります。翌年、帰国すると大学設立運動を再開し根気強い努力の末に、ついに同志社を拡大することに成功しました。すなわち、同志社予備学校、専門学校の設置、神学校や女学校、そして看護婦学校、図書館の創設など、将来の大学への発展に必要な制度上の基礎を確立することができたのであります。しかし、新島の体力はその精神力に比例しませんでした。祖国の道義的向上という遠大な運動を推進するのに必要な熱意と奮闘のために、すべてのエネルギーを使い尽くして、一八九〇年、ついに帰らぬ人となったのであります。以上が、新島の生涯と事業のスケッチであります。

さて、ここで新島の少年時代に立ち返って、彼が受けた家庭教育の中身についてお話ししたいと思います。まず、彼はサムライの子として生まれています。彼が受け継いだ血筋というのは、由緒ある先祖代々の血統につながるものであり、新島はそうした權威ある自らの出自について自覚しておりました。すなわち、彼はその性格の形成において重要な要因となった、生まれによる恵まれた特権を享受していたのであります。そしてこの身分上のメリットに加えて、彼は家庭で優れたしつけを受けていたのです。その点につい

て「覚え書」で次のように述べています。

「祖父は私のしつけに格別に熱心でありました。毎晩、私を彼の膝に抱いて、教訓的な話を語ってくれるのです。それは大昔の英雄や偉人の物語であつたり、賢者の話などでありました。そして祖父は、とりわけ、両親の言いつけに従順であるように、友人に対して忠実であるようにと教えました。同時にまた、話す言葉にはよく注意し、慎み深い行動をとるようにも言いました。さらに、決して人のものを盗んだり、欺いたり、媚びへつらつてはならないと諭しました。新島はまたその伝記の中で、少年時代に彼はよく方々のお寺に行つて自分が将来、立派なサムライになれるようにして下さい、というお祈りを捧げるのが習慣であつたと述べています。このようにして、人格形成に必要な知識や経験を積んでいたのですが、ある時、次のような出来事がありました。祖父が母の言いつけを聞かない新島の態度を聞き知つて、彼をつかまえて布団にくるんで押入れに閉じ込めたのです。そして、一時間ほどたつてからやってきて、押入れから出してやり、次のような詩を引用しながら優しく笹の葉のたとえ話を聞かせてやつたのです。「憎んでは打たぬものなり笹の雪」。このエピソードは、新島が家庭でどのようなしつけを受けていたかをよく言いあらわしていると思います。

一八五三年、ペリー提督の率いる黒船が浦賀湾で大砲を発射し、それまで鎖国の夢をむさぼっていた日本国民を目覚めさせ、国を覆つていた暗雲を取り除きました。安中藩主板倉侯は慌てふためく人々のなかで泰然としておりました。彼は高い教育を受けており、当時の状況をよく理解していたのです。米国の艦隊が日本にやってくる前に、彼はすでに軍事組織の改革の必要を指摘し、藩士たちに心身の鍛錬と向上に努めるよう奨励しておりました。新島は藩主の進歩的な思想の影響を受けており、特別に選抜されてオランダ語の修得と軍事教練を授けられていました。新島が大志を抱くようになるのは、何の不思議もありません。彼が祖国の状況を十分に理解できる年齢に達したとき、時代の騒乱に深い関心と危機意識をもち、時代にふさわしい愛国的感情が生み出す提唱の発露として、彼は祖国の改革を推進するための方策を求めて、新しい世界に船出しようと決意したのであります。即ち、彼はその行為によつて生

する犠牲を甘受しなければならぬ極端な手段であることを省みずに、近代的な教育を求めて日本を出国したのであります。彼は自らの将来に対して的確な展望をもっていたわけではありません。唯、「大いなる力」Higher Powerの加護に頼るだけでした。そのような行動は他の誰にでもできるものでなく、愛国的信念をもった人だけが、祖国と祖国の人々への愛情に没頭して計画された行為なのであります。新島がそのような断乎とした決断を実行できたのは、まさに武士道の精神があつたからだと弟子たちは確信しています。

ここで、私は、彼の性格のあらゆる側面で顯著にみられ、おそらくそれは武士道の精神に由来すると思われる一つの特徴を指摘することが出来ます。それは、自尊心と自己抑制の精神なのです。彼の青年時代の行動がこの主張を裏づけてくれます。たとえば、これはベルリン号の船上での出来事ですが、船長のある振舞が新島の自尊心をひどく傷つけたことがあります。思わず刀の柄に手をかけたのですが、そのとき、彼は自分の抱く使命感の大きさにくらべると、傷つけられた自尊心など小さいものだと思ひ直して、無鉄砲な行動を抑えることができたのは、まさに強い自己抑制のなせるわざであつたと思います。さらに、新島は誤つてワイルド・ローヴァー号の船長のキッチン用具（銀のスプーン 注）を海中に落としてしまったとき、持ち金を全部はたいて弁償しようとしてしました。その他、漢訳聖書を手に入れるために、資金の調達に、武士としての名誉の守りである刀を売却しました。そして、ハーディーが新島の目標達成のために必要な物資を惜しげもなく与えようとしたとき、彼は唯、教育費用として必要なだけの資金を受け取つたのであります。このような性格は、日本に帰つてから、彼が独り立ちした後の言動にもよくみられる特徴であります。要するに、彼は純粹な決意と曇りない良心の持ち主に違ひないのです。

正義感、騎士道精神（義侠心）、廉潔、忍耐、自尊心といった徳目は、明治維新のころの日本のサムライにみられる共通の道徳的特徴でありました。新島はこのようなサムライ階級のなかで育つたのです。そして、彼はアメリカへ行く前に、士族階級のなかで支配的であつた精神的環境の下で、その性格が形成されていたのであります。しかし、彼のアメリカにおける生活によって、自由な信仰と自治、克己の原則に基づくアメリカ精神の影響を受けて、本来の性格が修正されたことも事実です。言い換えれば、彼の武士

道（武士道それ自体は日本固有のものでありますが）が世界的な普遍性をもったものに成長していったと言えるでしょう。そして、彼が元来、正しいと信じていた道徳的な性質をもった教訓が、宗教的な教義へと変化していったと考えられるのであります。そのことは次の事例によく表われています。すなわち、岩倉使節団一行がワシントンに滞在していたとき、呼ばれて新島が岩倉全權使節と随員たちに面会することになりましたが、その際、旧来の日本式礼法に従って、彼らの面前に進み出て深くお辞儀する拝謁のスタイルをきっぱりと断り、自由な国の独立した紳士として、民主主義的に扱われるよう求めたのであります。

さらに、彼が日本の公使館がハーディーに対して、これまで新島のために支払ってくれたすべての経費を弁済する意向をもっていることを知ったとき、友人にハーディーがそれを受け取らないで欲しいという気持ちを書簡で伝えたといわれています。何故でしょうか。彼は、そのことによって生ずる、日本政府に対するあらゆる義務から自由でありたいという希望、あくまでも、一個の自由な日本の市民として、より高い次元の存在（神）である「大いなる力」に奉仕する道を選択したかったからなのです。このことは、自由な信仰と自治・自立が、生涯を通じて変わらぬ新島の道徳規範であったことを明示しています。

日本を刷新し、改革するには何をなすべきなのか。新島はアメリカに滞在中、ずっとこの問題を考え続けておりました。彼はアメリカ発展の真の原因は、高尚な国民精神にあり、そしてその国民精神の向上は、国民全般にいきわたったキリスト教主義思想の注入にあると考えました。熱烈な愛国者であった新島は、熱烈なキリスト者になり、代表的な武士道的キリスト者に生まれ変わったのであります。彼は普通の宣教師ではありません。また同様に、単なる教師でもありません。彼の信念は、武士道がキリスト教化されたものであり、それは多くの弟子たちが言うように、愛国心を縦系に、キリスト教を横系にして織られて出来上がった教義であるといえましょう。新島はその「覚え書」で次のように述べています。

「日本人は一般に英雄崇拜であり、独立の觀念が乏しい国民であるといえる。国民は自活の道を考えるが、彼らが崇拜する個々の英雄よりもっと高い次元の英雄は眼中にない。しかし、日本人の求める英雄というのは、自らの利己的な目的を超えた何者かに対

して、懸命に努力を捧げる対象の英雄ではない。もし彼らの精神が高められて、より高次の英雄 Hero of Heroes に関心が向けられるとすれば、国民はより高い水準の生活を享受できるのである。かくして、ここでの英雄とは、ソクラテスや孔子よりも優れた存在を意味する。彼は貧者の味方である。アレクサンダーやナポレオンは、到底、その英雄に比べることは出来ない。彼は人民のために自らの血を流す人であり、彼のために、人民が血を流すことを求める人ではない。もし、わが国民が、英雄崇拜者になることを希望するのであれば、私は、彼らがより高次の英雄を崇拜して欲しいと思う。国民がこのような真の英雄に対して目を向けるようになる日は、いったい何時のことであろうか。私はそうした日のくることを切望する」。

ここに展開されている主張は、彼が考える日本人の英雄観であります。そして、疑いなく、彼にとつて、英雄とはキリストの生命に表出される神の力を意味しております。ところで、彼は死の前日、弟子に次のような遺言を語ったのであります。

(一) 今後、同志社の実施すべき事業は、次の三つの不可分の目標からなること。すなわち、キリスト教主義に基づいた人民の道徳教育、文学、政治の興隆、そして自然科学の進展

(二) 同志社教育の目的は、神学、政治、文学、科学等諸学問の教育にあたること。しかも、そのいずれの営為においても、祖国に對して奉仕する精神的活力と積極的な行動力をもった人物、そして真実の自由を愛する人物の養成に向けてあらゆる努力を傾けなければならない。

(三) 同志社の社員は学生生徒を鄭重かつ親切に取り扱うこと。

(四) 自由で独立心の旺盛な学生（個懺不羈なる書生）に對してその行動をいたずらに抑制してはならない。彼らの本性を十分に尊重し順導しなければならない。

(五) 同志社は隆盛になるに従い機械的になる怖れがある。十分に戒心しなければならない。

さて、諸君は、新島の思想の主要な特徴が、「遺言」の第二段落によく表われていることがお分かりでありましょう。彼は人材の

育成にあたって、何に対して有益な働きをなすべきかという点を特に強調しているのです。つまり、人は、彼が生を享けた祖国に対して貢献することが必要であることを力説しています。そして、新島は死の直前まで、心身ともに日本のために全力を尽すことで、自らの主張の正しさを明らかにしたのであります。

しかし、彼はその目標を達成することの難しさ、あるいは、その目標のある地点に辿りつくことすら困難であることを十分に理解していました。同志社を完成するには何年かかるかとの問いに答えて、新島は、それは神のなす仕事であり、少なくとも二百年はかかるであろうと友人に語っています。彼はまた、一国の興隆発展は、何世代ものあいだ、多数の人民が不断に努力を傾注することによって初めて可能であると他の友人に語っています。新島は、決して彼一代の生涯で、事業を完成させようとは思いませんでした。しかし、彼自身は目標の達成にあらゆる努力を傾け、すべての方策を使い果たしたことは確かであります。そして、その結果、ついに生命まで縮めてしまったのです。

新島の最も著名な弟子の一人に、国民新聞社の経営者で主筆でもある徳富猪一郎がいますが、先日、私の求めに応じて、新島に関する多数のパンフレットを送ってくれました。徳富は新島の下で、数年間、学問したことのある人物であります。その徳富が書簡で、新島の基本的な教育目標というのは、武士道の精神的鍛錬に基礎づけられたキリスト教の教えを適応することにあつたといひ、新島は、いわば、洗礼を受けた吉田松陰である、と今なお信じていると述べております。

さて、吉田松陰とは何者でありましょうか。ペリー提督の『日本遠征記』を読んだ人は気づかれるでしょうが、そこに次のような一節があります。すなわち、一八五四年四月二十五日、午前二時ころ、二人の若い日本人紳士が下田港に停泊している提督の旗艦にやってきて、アメリカまで乗船させて欲しいと頼みこんだのです。しかし、提督は日本政府の許可が得られるまでその要求に応ずることが出来ない、といって拒否せざるを得ませんでした。二人のうちの一人は、公式記録では、Kwansuchi Manji(マン)という偽名を使っていますが、その人物こそ誰であろう、ここで述べられている吉田松陰その人なのであります。

吉田松陰は、日本の近世史上、特筆に価する人物であります。彼はアメリカ合衆国に渡航して、西洋の生活や社会秩序を学ぼうとしたがために捕えられて、主君の長州藩主によって監禁されました。松陰が学校をつくり、彼の愛国的思想の多数の信奉者を養成したのは、この藩主の監視下に置かれていたときのことです。信奉者の中には、現在、伊藤博文を含めて、官界や軍部で活躍する多くの有力な人材がいます。伊藤はそのなかでも、最も重要な政治家といえるでしょう。彼は大日本帝国憲法の立案者として、西洋諸国でよく知られている人物です。松陰の偉業の最大の特徴は、彼が幽閉されている二ヶ年という短い期間に、このように、多くの愛国主義的改宗者を生み出したという点にあります。

しかしながら、吉田松陰は徳川幕府の政治に抵抗し続けたのです。そして、天皇の政權回復をめざして熱心に運動し、何度も反幕的政治行動を行いました。そして、ついに、彼は三十歳で憂国の志士としてその死を迎えることになったのであります。松陰は強力な意志と個性の持主でありました。彼は生きて自ら愛国的目標を実現することはできなかったのですが、弟子たちが立派にその遺志を引き継いで幕政改革を達成しました。これが、新島の弟子たちが、洗礼を受けているか否かという点を引き合いに出して、彼らの愛する恩師との比較を試みた吉田松陰の姿なのです。それは日本人の考え方からすると、決してささやかな賛辞ではありません。

このように、新島と緊密な間柄にあった友人や弟子たちの見解に従って、その生涯と人物を考えますと、彼は信条においてキリスト者、理想として抱くのは愛国心であったというのはどうやら疑う余地がなさそうです。彼が亡くなるや、公私両面で新島を知る人たち、そのなかには、かつて新島の事業に激しく反対を唱えた仏教界の僧侶もいましたが、彼らすべての人々が心から哀悼と尊敬の意を表したのは何ら不思議ではないでしょう。

おわりに、もう一点付け加えたいことがあります。新島は事業を展開するうえで、多くの反対や妨害に出会いましたが、自ら慰められることもありました。大学設立運動を進めていた彼は、同志社を大学としてかなりの水準にまで向上させることができただけでなく、亡くなる前年の一八八九年には、帝国憲法の発布を見ることができました。そして、憲法によって、公共の秩序と安全、

臣民としての義務に反しない限り、日本国民は信教の自由を正式に保障されることになったのであります。彼自身は信教の自由の保障を生きて十分に享受することはなかったのですが、新島に同情的な人は誰でも、この権利の実現に関して、明治天皇の叡智がうまく働いたことを、彼のために祝福するであらうということをし、敢えてここで言明しておきたいと思ひます。そしてまた、彼らは憲法上の保障が、着手してまだ十分に開花しないうちに、生涯を終えてしまった、新島の神聖な事業の継続を奨励するであらうと思ひます。

数日前、私が今この国を旅行している同胞の一人から聞いた話に、興味をもたれる方がここにおられるかもしれないと思ひます。その人がいうには、日本の上流階級に多数のクリスチャンがいること、そして、日本人のキリスト教信者のあいだで、最も影響力のある教派は組合教会であり、そこには新島の多くの弟子が有力なリーダーとして活躍していることをあげて、新島の努力の成果を強調しています。キリスト教化された武士道が、やがて日本帝国の各地で大きく枝をはり、明治天皇の各界の忠実な臣民のあいだに広く浸透する日がやってくるかも知れないでしょう（終り）。